

## 出題傾向の 解説&解答の ポイント

## 2020年度 一般推薦I期【専願】【併願】の 「英語」と「国語」を詳しく解説!

# 英語

### 解答のポイント

#### 出題形式

本日程の試験問題は、文法・語法問題1題、会話文問題1題、整序英作文1題、英文読解1題の大問4題で構成され、問題数は25問である。すべてマークシート方式で、選択肢の数は大問によって異なる。試験時間は国語と併せて60分であるため、30分を目安に解答時間を見積もることとなる。目安時間を考慮しても、完答するのが難しい問題数ではないと言える。第1問は、文中の空所補充形式で、会話の表現を含めた、基本的な文法・語法、語彙、熟語の知識が試される。第2問の会話文問題は、連続する二人の会話内に空所が5か所あり、5つの選択肢から適切なものを選ぶ形式である。会話の表現よりも、発話のやり取りを把握する力が重視されている。第3問の整序英作文問題は、和文の意味に沿う英文を完成させるために、4つの選択肢を並べかえる問題である。主に、基本的な文法、熟語の知識が問われている。第4問は350語程度の英文に関して、語彙(語義選択、アクセント)、文脈解釈、内容一致などを問っている。文章で用いられている語彙は、ほぼ検定教科書で用いられているものと同程度であるため読みやすい。設問は、主に語彙と文法に関する問題であり、基本の知識を活用し運用する能力を問うことに重点を置いていることがわかる。

全体的な難易度は、高校英語基礎～標準レベルだと言える。対策としては、高校で学習する語彙、熟語、文法・語法などの基本事項を、余すところなく身につけることが大前提である。それでは、各大問の特徴を踏まえて対策を考えていこう。

第1問では、基本的な文法・語法などの知識と運用力を試している。そのため、まずは学校で学習したことをきちんと復習し徹底させ、必ず身につけておくことが絶対である。学校で使用している文法中心の問題集などを繰り返し解きつつ、今までに学習した語彙は必ず覚えておこう。その後、入試標準レベルの問題集に当たればなお良い。

第2問の会話文問題は、会話特有の口語表現よりも、適切な受け答えができるかどうかのカギとなる。空欄の前後を確認して、空所に入る表現を自分で考え、その表現に近いものを選ぶようにすると良い。日頃から、「問いかけ」や「返答」を一言で表現するように努めると良いだろう。

第3問の整序英作文では、和文が与えられているため、それをうまく活用しよう。並べ替えるべき和文の部分特定して解答にとりかかると良い。動詞に関する表現や基本的な熟語の出題が多いので、文法中心の問題集を解くだけでなく、単語・熟語を身につけておくことが必要だ。その上で、基本文法を学校で使用したテキストを使い定着させ、そこにあった熟語や構文は全て完璧におさえておこう。

第4問で出題される英文は比較的短めで、語彙も易しめであるため、取り組みやすいが、入試対策用基本～標準レベルの単語を完成させておく必要がある。日頃から、英文を読むときは音読するようにしたい。英文を読むのが苦手な受験生は、音声付きのテキストがあれば、それを使って一緒に読み進めると良い。最終的には、入試入門レベルの文章に挑戦するとさらに良い。

# 国語

### 解答のポイント

#### 出題形式

全体で大問が6問。大ざっぱには、第1問～第4問が現代文、第5問、第6問が古文の出題である。大問ごとの設問数は少なく以下の通り。なお、すべて五者択一のマーク形式。

第1問は、問題文が2420字程度、設問が2つ。問1が漢字問題6つ、問2が内容合致問題であった。

第2問は、問題文が2100字程度、設問が3つ。すべて空欄補充問題。問1が空欄4つに入る語の組み合わせ、問2が接続語句の空欄が2つ、問3が10～15字程度空欄補充問題である。

第3問は、問題文が1240字程度で、設問は1つ。中程の形式段落4つの整序問題である。

第4問は、漢字の読み(の間違っているものを選ぶ)が5問。

現代文の問題は、問題文の内容も標準的なものであり、設問もいずれも基礎的な学力を問うものであり、難問はない。

第5問は、175字程度の古文に、参考現代語訳(205字程度)が付けられ、設問が4つ。古語の意味、助動詞の空欄補充問題(現代語訳を参照して選べる)、「おなじ心」の内容、和歌の発想の元を問う問題が出題された。

第6問は、古文の短文の中で傍線部の意味(2～5字)を問う問題が4問。いずれも古語の知識や古典常識、基本的な文法知識があれば選べる。

古文の出題も、基礎的な知識を問う問題がほとんどである。

大問が6題と、多くはあるが、問題文はいずれも比較的読みやすい文章であり、設問数も少なく、知識に関する問題が中心で、平易なものが多い。時間が足りずに焦るといったようなことはないだろう。

現代文は、17個のマーク数に対して漢字の問題が11個である。まずは、地道に漢字の問題集に取り組みと共に、普段から辞書をこまめに引き、語彙(い)力をつけること。漢字問題は「覚えていないから解けない」よりも「この言葉を知らないから分からない」ことの方が多くははずである。空欄補充問題や内容合致問題は一般的な設問形式である。基礎的な現代文の問題に取り組みれば良い。第3問の段落の整序問題はやや難しいが、まずは接続語句や指示語に着目し、「この2つは確実にX→Yの順序」という核をつかまえて選択肢を絞り、残った選択肢のどれが、いちばん論理がつながるかを検討すればよい。また、内容合致が苦手な受験生は、まず選択肢にざっと目を通していき、問題文を読みながら似たような箇所に出会う度に、本文と選択肢を見比べるという方法も有効である。

古文はほとんどが基礎的な知識を問う問題である。第5問の問題文には現代語訳がついている(傍線部の箇所は訳がついていないが)し、第6問は短文による出題なので、本格的な長文読解力が求められているわけではない。300語程度の単語帳などで古語の知識を身につけるとともに、基礎的な文法事項(用言の活用、助詞、助動詞、係り結びの法則など)をマスターしておこう。ただ単純に項目だけを暗記するのではなく、古語については例文の中においてその語がどんな意味になるのかを押さえておくことも重要である。助詞、助動詞も実際の例文のなかでどのように使われ、どのような意味、訳し方になるのかを確認しよう。